あしなが育英会シンポジウム

震災と心のケア30年

子どもの居場所とこれから

阪神・淡路大震災をきっかけに神戸レインボーハウスが開設され、日本で初めての震災遺児への心のケアがスタートしました。レインボーハウスは震災遺児たちが仲間やボランティアとの絆を深め、安心できる「居場所」としての役割を果たしてきました。以来、東日本大震災などの災害や自死、病気などで親を亡くした子どもたちの心のケア〜子どもの居場所〜の活動が全国に広がっています。

本シンポジウムでは、子どもの「居場所」づくり政策を担うこども家庭庁職員、母親を亡くした当時3歳の震災遺児、復興とレインボーハウスの活動を追い続けてきた元新聞記者、ボランティアを経て職員として心のケアに携わり続けてきた神戸レインボーハウススタッフが、それぞれの30年の経験と想いを語り合い、これからの「居場所」について考えていきます。

日時

2025年1月12日(日)
14:00~16:00 (13:30受付開始)

会場

神戸市教育会館 大ホール
〒650-0004 兵庫県神戸市中央区中山手通 4-10-5
地下鉄 県庁前駅(東 1番出口) 徒歩 5分
ＪＲ・阪神 元町駅(東口) 徒歩 10分

オンライン配信
Zoomウェビナーで生配信
申込をいただいた方に、URLをお送りします

参加申込

QRコードを読み込み、
1/9(木) 17時までに
お申込み下さい。
対面は申込み先着順で、
定員(100人) になり次第、
締め切ります。

対面＆オンライン開催

参加無料

ASHINAGA あしなが育英会

＜主催＞一般財団法人あしなが育英会　＜後援＞こども家庭庁、兵庫県、神戸市
＜お問合せ＞あしなが育英会神戸レインボーハウス TEL 078-453-2418（平日 9~17 時）メール rainbow-care@ashinaga.org

シンポジスト

大山 宏 氏 Hiroshi OYAMA

こども家庭庁成育局成育環境課 居場所づくり推進官。東京都内の社会教育施設で、地域のこども・若者の居場所づくりや、地域全体でこども・若者を支える環境づくりに関する事業を担当した後、独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター研究員を経て、2024年4月にこども家庭庁に入庁。現在は「こどもの居場所づくりに関する指針」の普及啓発に関する事業や、調査研究事業等を担当する。社会教育学や若者支援等について、駒澤大学、法政大学、明治学院大学の兼任講師も務める。

中埜 翔太 氏 Shota NANANO

神戸市出身。3歳の時に阪神淡路大震災に遭い、家の下敷きに。母親の成美さん（当時25歳）を亡くす。震災直後からあしなが育英会のケアプログラムに参加。レインボーハウスが開設してからは、学校帰りに毎日のように立ち寄り、心の拠り所、居場所としていた。高校生になってからは海外交流プログラムにも参加。大学生からはファシリテーターとして、後輩遺児のケアに関わった。大学生の時に発生した東日本大震災においては、被災地の人々に寄り添おうと20回以上現地を訪れる。神戸市在住、会社員。

磯辺 康子 氏 Yasuko ISOBE

神戸大学戦略企画室広報・基金部門、特命准教授。神戸新聞社の記者だった1995年に阪神・淡路大震災を経験し、以後、主に災害報道を担当。阪神・淡路の被災地の復興過程とともに、国内外の被災地を取材。在職中、災害時の心のケアをテーマに米国・UCLAで研究した経験も持つ。2015年、神戸新聞社を退社後、国内外で外国人の日本語教育などに関わった。2023年5月から現職。あしなが育英会の大学生寮「虹の心塾」（神戸）で読書感想文指導も行っている。日本災害復興学会広報委員。

峰島 里奈 Rina MINEJIMA

あしなが育英会職員。阪神淡路大震災の被災体験や父との死別体験から、親を亡くした子どもたちのサポートに関心を持ち、大学在学時に神戸レインボーハウスのボランティア（ファシリテーター）となる。2005年関西学院大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士課程前期課程修了。修士（社会福祉学）。同大学実習助手、非常勤講師を経て、2010年入局。神戸レインボーハウスで、主に小中学生を対象とした心のケア（グリーフサポート）に携わっている。社会福祉士。

コーディネーター

八木 俊介 Toshiyuki YAGI

あしなが育英会職員。1993年に入局。1995年の阪神・淡路大震災では、震災発生直後より震災遺児のケアプログラムやつどいなどに携わり、神戸レインボーハウス完成後は館長代理として勤務。東京レインボーハウス（2007年）や、東日本大震災後の東北レインボーハウスにおいても、ケアプログラムやつどいの運営に携わる。在職中に武庫川女子大学院にて博士課程（臨床教育学）を修了。著書に『レインボーハウスのこどもたち―阪神・淡路大震災遺児の10年』（2004年）。

阪神・淡路大震災とあしなが育英会

1995年当時、私たち「あしなが育英会」は、設立2年目を迎えたころでした。震災発生直後に、本会は震災遺児を探すため、新聞の犠牲者名簿をもとにローラー調査を実施し、573人の震災遺児を見つけました。

同年8月に震災遺児を招待し開催した海水浴のつどいで、父と妹を亡くした少年「かっちゃん」（当時小5）が、黒く塗りつぶした虹が空に浮かぶ絵（黒い虹）を描きました。子どもたちの心はここまで深く傷ついているのだ。震災遺児たちには心のケアが必要だ―と決心した瞬間でした。

1999年1月に、日本初の遺児の心のケア施設「神戸レインボーハウス」が神戸市東灘区に竣工。多くの震災遺児が通い、プログラムに参加し、巣立っていきました。

神戸レインボーハウスでは現在、震災以外の病気や災害、自死などで親をなくした子どもたちを対象としたプログラムを開催しています。

㊤震災遺児ローラー調査 ㊦黒い虹